

三人の子を連れ福島の空気の匂いに少しづつ染められつ  
駒田晶子

福島への里帰りの歌。福島が特別な土地になってしまったせいで、子供をつれての里帰りも、独特なニュアンスを帯びてしまうようになった。下旬、その独特のニュアンスを表現して的確。

またひとり青きシートに包まれて瓦礫の中を運ばれにけり  
和田敏典

テレビは死者を映さない。この作はあえてそこをうたっている。報道写真に取材した作とはおのずから異なる宮城県在住の作者の作。「またひとり」が、作者のしている時間の長さを表現。

朝見れば昨日より大きくなっていく苦瓜と一歳と三歳の子ども  
堀越貴乃

不思議な取り合わせ。ニガウリの実のあのごつごつした見てくると、まだ幼い二人の子供の対比がなんともユーモラス。子供をうたった近來の秀歌と読む。

日本は蔑称のごと響くかな少年の顔ははつか歪みて  
羽鳥潤

記録映画『リーベンクイズ』で、私たちは、かつての日本軍の兵が中国人に「日本鬼子」(日本の鬼たち)と呼ばれていたことを知った。そうした歴史の波紋がふと現在に及ぼうとする瞬間に取材。取材感覚が、いい。

## 短歌の現在

### No.376 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

パンを焼く匂いは世界共通の夜明けの気配動き出す  
朝 木村俊介

外国旅行の歌として特色がある。外国旅行詠は観光つまり風光を観る歌が多いのだが、これはややちがう。結句の軽さもいい。

街の空高きところに月上がり地上の営みを離れて光る  
松橋雅実

街の上空の月をうただけながら、月が街やわたしたちの生活を相対化している感じをうまく表現している。下旬の、神経が行き届いた表現に注目。

バタック族の犬食う町に眠りいる黒犬二匹ゆめゆめ太るな  
水口良子

「眠りいる」と「ゆめゆめ……」がひびきあつて、旅の歌というよりも、童話の中の一場面のような雰囲気のものらしい一首となった。

話題は、フィリピンのバタック族。彼らは古く犬を食用としていたらしく、実際に、バタック・ドッグという食用の犬種があるらしい。今は、犬を食う人は少なくなり、犬料理は一部の人だけが食べる高価なものになっているという。作中のこの黒犬は、大丈夫、太っても食われることはなさそうだ。

帰らな はちす葉のうへ露ひとつうらうらとして晚  
夏光あり 山本陽子